

新島 襄全集刊行に寄せて

上野直蔵

新島全集の発刊は多くの人々の鶴首するところであった。むしろ遅きに失したくらいだと言ってもよいだろう。このたび全十巻の予定で計画が成り、その第一巻の教育編が上梓される運びになったことは欣快に堪えない。

新島 襄は同志社の創立者であるだけでなく、先見の明を備えた教育者であり、傑出したキリスト教の伝道者であった。この教育者・伝道者は一日にして成ったものではなく、激動する幕末の時期に、国禁を犯して日本を脱出、一年余りの苦役に服してボストンに辿りつき、当時の米国の一流の教育を受ける機会を得、欧米の高等教育機関を正式に卒業した日本人第一号となった人物だった。たまたま彼の在米中に岩倉具視遣外使節団の訪米するところとなり、新島は田中不二麿文部理事官の案内役・通訳として、米国東部のみならずヨーロッパ八ヶ国の教育・文化の制度

と状況をつぶさに視察してまわる機会を得た。新島は一八七三年の時点で、欧米の教育制度に最も精通した日本人であったといってもいいであろう。彼は欧米の文明の精神的基盤となっているものが、キリスト教であることを見抜き、発念してみずから聖書を学び、洗礼を受け、ついに牧師になるための按手礼をも受けたのである。しかも彼にはもともと自然科学に対する並々ならぬ関心があり、脱国以前に早くもオランダの数理書を通して微積分を学ぶという、維新前の日本においては数学の分野で到達できる最高の水準に到達していた。

彼の生涯にはわれわれが、これは、と思うような数奇な出会いがある。小説家ヘルマン・ヘッセが、最初に出会った日本人が新島であったことも、今では確かめられている。マシュー・アールドという詩人・批評家がイギリスにいる。どの文学史においても最大の頁をさかざるを得ないほどの文豪である。実はロンドンにおいて英国の教育制度についての説明を新島にしたのが、当時イギリスの文部省の役人でもあったこのアールドだったことも、今回刊行される新島の英文日記があきらかにするであろう。今までに知られたる、そしてまた知られざる新島 襄の全貌は本全集を読み通すことによってあきらかにされるものと私は期待とよろこびをもって確信する。

新島全集の計画はもともと同志社創立九十周年（一九六五）記念事業の一部として企画され、先ず新島先生遺品庫の収蔵目録の作製がはじまった。今日までに、新島研究家として第一人者である森中章光氏の手になる、『新島先生書簡集』正統二卷（一九四一、一九六〇）が刊行されてきたし、また日記、紀行文、説教のたぐいも『新島研究』誌に次々にかかげられてきた。今回の企画はそうした先人の業績に負うところ多大であるけれども、はじめての新島全集である以上、

学問的にもすぐれた厳密な本文校訂にもとづき、かつ読みやすいものにするという編纂を銳意心がけ、複数の目を通して校訂が繰返されたことを付記しておきたい。ちなみに前記二巻の書簡集発刊以降に発見された新島書簡の数は三百通にのぼり、つい今月になって、北海道大学で発見されたものも含まれている。A・S・ハーディーの *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* は新島の自伝的要素が濃厚であるので、今回全集委員会の手でこれを全訳し、全集の一部に加えることにした。日記、紀行文の中に見出されるスケッチや挿絵のたぐいもできるだけ収録される筈である。新島の英文書簡と英文日記は従来ほとんど未開拓の分野であったが、今回はじめて活字化される。これは略字、略号などが頻出するため非常に読みづらいものを苦心の末に読解したもので、極めて興味深い資料となるであろう。

今回の全集は、同志社という一私立学校の創立者の断簡零墨を拾集したというものではなく、新島 襄という「近代日本の英雄的開拓者」があらためて読みなおされ、とらえ直されることを心から念願して編纂されたものである。

この全集の編集には同志社総長からあらためて委嘱された六名の委員、同志社大学人文科学研究所の杉井六郎教授、神学部の高橋虔名誉教授、文学部のオーティス・ケリー教授と北垣宗治教授、工学部の島尾永康教授、ならびに同志社社史史料編集所の河野仁昭主任が当った。社史史料編集所の松井全、竹内力雄の両氏、さらに読み本つくりと校訂作業に献身された大学院学生諸君（山田芳則、宇佐美英樹、古宮雅明、藤田恒春、湊史子、本田妙、桑山典子）の努力に対し、心から謝意をあらわすものである。同朋舎のスタッフ、なかんずく竹屋 誠氏の労を多としたい。

一九八二年七月 同志社総長